

美大キャンパス修景計画

鏑 隆 弘

1. はじめに

ここでは、フィットネスの概念が、ランドスケープデザインに見られる例として、金沢美術工芸大学の前庭を中心としたキャンパスの修景計画を紹介する。

金沢美術工芸大学のキャンパスの前庭部分は、図書館棟の増築（平成12年5月完了）と前面道路の拡幅整備（平成14年3月完成予定）により、その敷地形状を大きく変えることとなった。大学は、平成11年春より教員4名からなる前庭整備研究会を発足させ、キャンパスの前庭部分の新たな形態を検討することとした。この研究会は、平成12年3月に「前庭整備計画」をまとめている。この計画の報告書は、前庭からテニスコートにかけての新たな敷地形状において、環境条件の整理から始まるプロセスを踏んで、修景方針と基本設計段階までの具体的な形を提案している。

ランドスケープデザインでは、建築などの空間計画と同様に、屋外空間の計画に当たって、環境条件として敷地及び周辺の地形や植生の自然条件のほか、道路や建物、人の活動、歴史などの人為条件などを整理し、それらの中から、設計者は創造しようとする空間に対し好ましいものをどのように取り入れ、好ましくないものをどのように扱うかを検討し、全体のイメージをつくりあげてゆく。ランドスケープデザインと同様に「修景」という言葉が使われるが、様々な環境の与条件の中に、作りだそうとする景色をうまく修めるといふこのデザインの分野の本質をよく表している。まさしく屋外空間におけるフィットネスである。

ランドスケープデザインの分野は、地形や樹木の形を扱う点では、自然の条件を取り入れながら社会基盤を作る工学である土木との結び付きが強い。

「土木」という言葉は、中国の「淮南子（えなんじ）」という書にある、「築土構木」に由来し、「人々が安心して暮らせるように聖人が、築土構木をほどこす」ことだそうである。（「風土工学への招待」風土工学研究会編集より）一説では、水火金木土からなる五行の相剋の考え方の中に、木は土に勝ち、土は水に勝つという部分を引用したものとされている。この国では昔から、暴れる川の流れをコントロールすることが、農地や都市の生活基盤を守ることであった。水を制する土と、土を抑える木を扱うことから、この分野を「土木」と称するらしい。この分野は扱う材料である大地（土）や植生（木）など土木工学との近い関係を見れば、自然条件によって影響を受けやすいものといえる。

この計画で提案する形は、前面道路の拡幅による前庭空間の縮小、卯辰山への眺望景観の向上、図書館棟の増築によるランドマークの出現、緑地空間の縮小、前庭内の樹木の減少、敷地の以前の土地利用形態など、敷地を取り囲む諸条件が、前庭を中心としたキャンパス及び地域の形の本質に強く関わっている。本文は、「前庭整備計画」の報告書の概要を用いて、造形のフィットネスの身近な事例を示すこととする。

2. 前庭周辺空間の修景方針

前庭周辺空間の修景方針は、次のような敷地の景観の特性を前提としている。

金沢美術工芸大学（以下美大）は、金沢の街の中で、東から西に延びる3つの丘陵のうち、中央の小立野台地上に位置する。この台地の両側は、川の流れが削り取った急斜面となっており、樹木の生育する樹林地となっている。3つの丘陵、間を流れる2つ



図-1 向うが日本海、中央が小立野台地

の川、丘陵と川の間を斜めの緑は、東から西へと続く大きな景観上の流れを形成している。(図-1)

美大の前面道路である県道は、地域の幹線道路として拡幅整備されている。これにより小立野台地を南から北へ横切る形で大きな空間が生まれる。東から西への景観の大きな方向性に直交する形の軸が発生する。(図-2) この軸上からは、浅野川の谷越しに、樹林に覆われた卯辰山を望むことができる。卯辰山と視覚的なつながりを持つ前面道路沿いの空間は、緑豊かな緑地景観軸としての性格を持つこととなる。

一方、美大は創作研究の場というだけでなく、近隣住民にとってのスポーツや散策などのためのオープンスペースとなっている。周囲の竹林は、医王山から続く小立野台地の斜面緑地の一部を担っている。

前面道路と美大敷地は、機能は異なるものの、どちらも近隣にとっては、大きな緑地機能を提供している。

上記の敷地および周辺の景観の特性をふまえ、全体の修景の方針を次の文章と図-3に示す様に設定した。

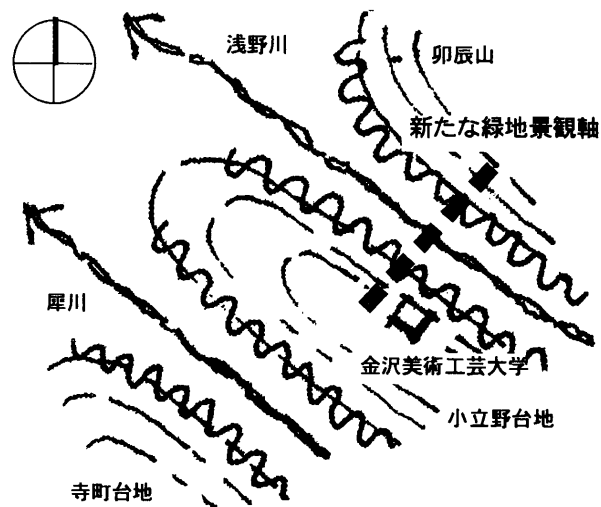


図-2 美大周辺の景観の特性

—取り込まれる眺め—
道(地域)の背景としての庭、
庭の背景としての道。
お互いの背景をつくる。

前庭整備においては、キャンパスの屋外空間を創作・研究に相応しい緑地として計画すると共に、整備される道路に似合う背景を演出するものである。修景において医王山、卯辰山に続く地域の緑地景観を取り込むことで、一層の質の向上を図ることができる。また、道路の拡幅整備は、利便性、安全性において地域の生活空間の質の向上を図るものであるが、美大の前庭を背景に持つことで、キャンパスの中で営まれる創作活動を地域に取り込むこととなる。これは、地域の特色を高めることであり、景観面においての生活空間の向上を図ることができる。共通する緑地景観を媒体とし、前庭から道路まで一体に修景することとする。

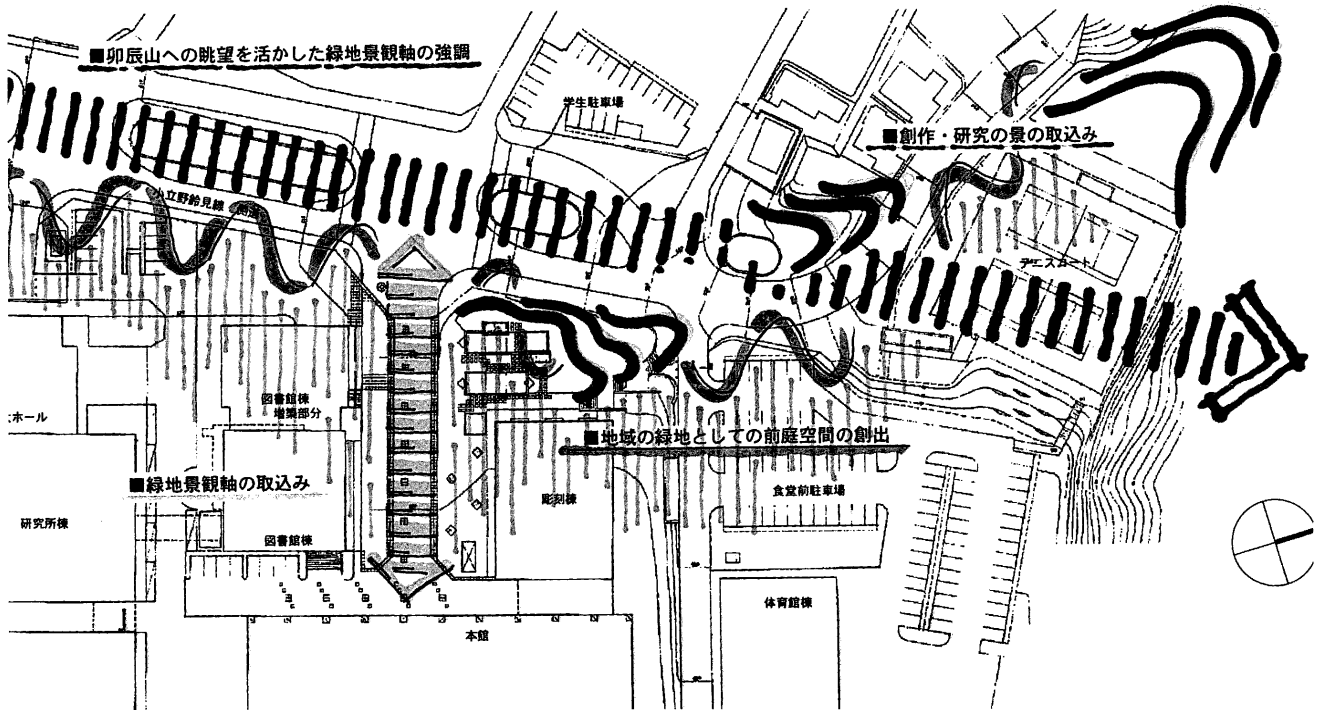


図-3 修景の方針

3. 雰囲気づくりの考え方

修景の方針に基づき、敷地全般と7つのゾーンについて、雰囲気づくりの考え方を設定した。併せて、現況と検討課題を示すこととする。

① 美大屋外空間全般について

現況

- ・乱雑な駐輪、駐車により美観が損なわれている。
- ・出入口以外に建物内部と空間的連続性を持つ箇所が少ない。
- ・たむろしたり休んだりするたまりの空間が少ない。

検討課題

- ・駐車場の検討
- ・駐輪場の検討
- ・たまり空間の創出

修景計画

- ・駐車場、駐輪場について

駐車、駐輪は然るべきところに整然とされるのが、安全上かつ美観形成上好ましい。

車両の駐車については、教員、職員、学生の駐車場を定め、駐車許可やパスゲートなどによる車両の管理を行う。

駐輪については、駐輪場を増設することで、乱雑な駐輪を解消することとする。駐輪場は、駐輪を誘引するために建物の出入口に近いところを選び、屋根付きのものとする。



図-4 正面アプローチ現況

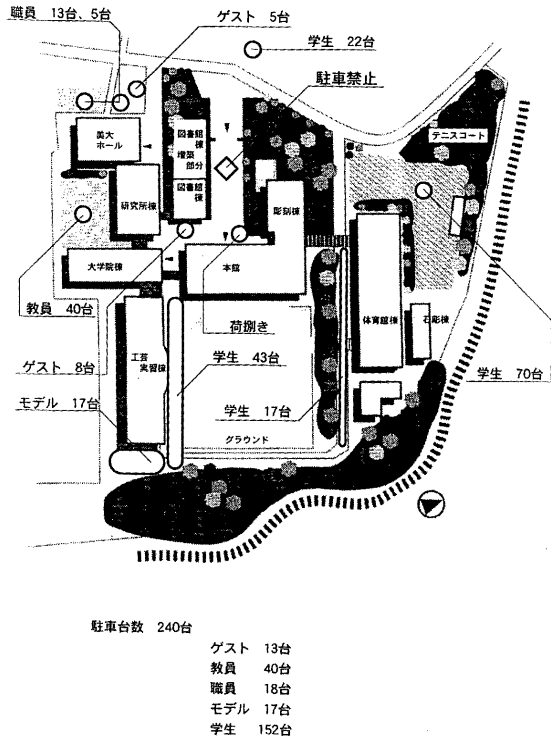


図-5 駐車場計画図

・たまりの空間の創出について
現状で屋外にくつろいだりする場所は見当たらない。原因としては、人のたまるための仕掛けが無いこと、出入口以外に建物内部との空間的連続性を持つ箇所が無いこと、外部空間の動線が歩行者に対する配慮を欠いていることなどが、挙げられる。たまりに相応しいゾーンでは、その場所に行きやすい仕掛けや座りやすい仕掛けを施すことで、外部空間でのアクティビティを誘うこととする。外部空間でのアクティビティの様子は、道行く人からの眺めの中でキャンパスの活気を見せるものとなる。

② 正面アプローチ

現況

- ・正門が仮設であり拡幅された道路や正面アプローチ周りの建物のスケールに対して、貧弱である。
- ・道路から本館までの距離が、以前に比べ短くなり、奥行き感が少なくなっている。

- ・常時、駐車があり両側の修景地が隠されている。
- ・以上のことから、正面入口としては不明確な形態を呈している。

検討課題

- ・正面性の演出
- ・駐車車両の取り扱い

修景計画

- ・正面性の演出

仮設正門を撤去し、アプローチ形態の変更、高木植栽、緑地帯の拡充によって視覚的、空間的に明確なアプローチ空間を創る。

アプローチの奥行きを強調するため、幅を現在より小さくする。幅は大型車両が充分すれ違うことのできる9.8mとする。また、高木を彫刻棟と図書館棟に沿って列植することで本館への奥行きある眺めを形成する。前面道路より幅の狭いアプローチと両側の緑量ある高木列植により、道路より入ってくる人が、空間のボリュームの変化を感じることができる形とする。

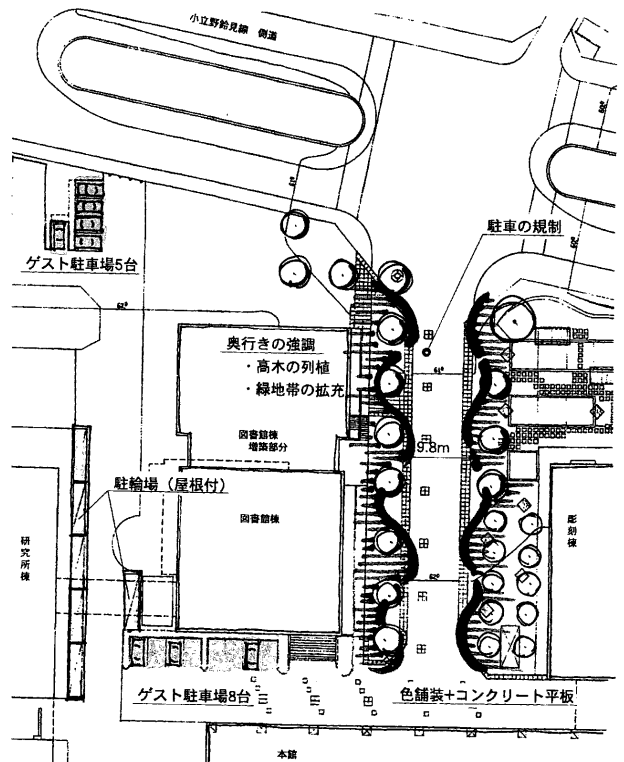


図-6 正面アプローチ修景計画

舗装面は、道路と色の異なるアスファルトとし、コンクリート平板を使った見切りとする。コンクリート平板は、建物の柱のグリッドを反映させ、舗装面のアクセントとする。素材と、グリッドパターンにより、内部空間の雰囲気が外部空間へしみ出す形とする。植栽地は、植栽を引き立てる赤い色の瓦砂利を敷くこととする。柔らかい表面を作ることで駐輪を排除することが可能となる。高木は、図書館棟の柱のグリッドにしたがって、アプローチ沿いに列植する。これにより、現況で欠けている内部空間と外部空間の連続性を形態的に演出する。

植栽種は、季節感を強く見せる落葉樹で、奥行き感を強調する列植にふさわしい単幹のもので、大きくなるものとする。候補としては、トウカエデ、ヤマナラシ、ポプラ、メタセコイア、イチョウ、ユリノキなどである。

・駐車車両の取り扱い

正面アプローチの駐車は、排除する。アプローチ景観の演出が映える形とする。機能的には、死角を作る車両駐車をなくすことで、歩行者の通行にとって快適な空間となる。また、材料や作品などの荷捌きにとっても、駐車車両が無いことは、機能的である。ゲストのための駐車場は、図書館棟周りと美大ホールの隣に設置するものとする。台数は、13台を用意する。現在、アプローチに駐車している車両は、前庭道路反対側の学生駐車場と、食堂前駐車場で収容する。

バイク、自転車の駐輪場は、研究所棟と図書館棟の間に設置する。本館前の駐輪を規制することを平行して行うことで、正面性の演出を充実させることとする。

③ 図書館棟増築部分周り

現況

- ・図書館棟の建物は、道路沿いの眺めの中で、大きなガラス面とコンクリート面が目立つ添景物となっている。
- ・南から西にかけてのL型の緑地である。

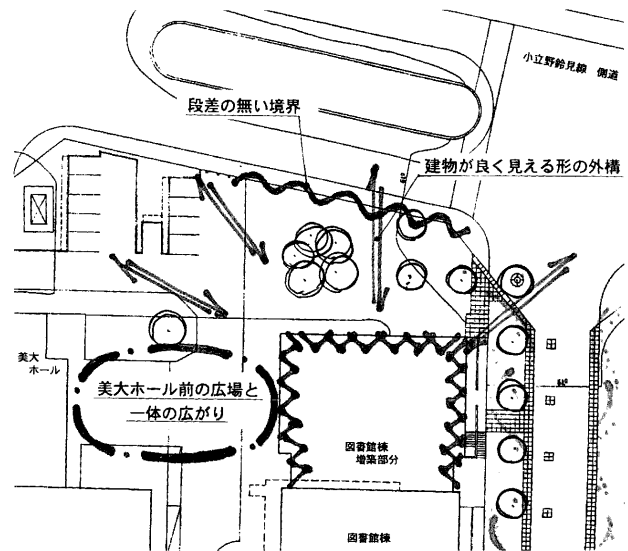


図-7 図書館周りの修景計画

- ・南側は美大ホール前の広場と一体の、まとまった広がりを持つ空間である。
- ・西側は、道路面よりやや高い、平坦地となる。図書館棟壁面から道路端までは、15~25mの幅を持つ。

検討課題

- ・図書館の外構空間として緑地の演出
 - ・道路と図書館の緩衝帯としての演出
- 修景計画

- ・図書館の外構空間として緑地の演出

図書館の増築部分の建物は、コンクリート、ガラス、アルミニウムの硬い素材と、キューブの整形の形が、周りの樹々と強いコントラストをもっている。周囲からの眺めにおいては、大変目立つものとなっている。外構の形においても、この景観特徴を保つものとする。高木の生育する中、建物が背景に見え隠れするものとする。

建物の1階部分は、ほとんどがガラス面であり、視覚的に内外の連続性の強いものとなっている。中からの眺めにおいて外との連続性をさらに強調するために、外構は見通しの効くすっきりした形とする。植栽は芝生と高木のみとする。高木は柱のグリッドに沿った列植とし、内外の連続性に配慮する。正面アプローチと連続する部分であり、

高木の樹種は、正面と同様のトウカエデ、ヤマナラシ、ポプラ、メタセコイア、イチョウ、ユリノキを候補とする。

また、ここは南から西の日当たりが良く、車両の通行も少ない場所である。美大ホール前の広場と一体のひろがりのあるたまり空間となるよう、南側は芝生地とする。

・道路と図書館の緩衝帯としての演出

外構空間も市民に開放された図書館と同様に、周囲と空間的に連続性を持つ形とする。道路の歩道と前庭空間の境界は、できるだけ段差を設けず、視覚的かつ空間的に一体の雰囲気のある形とする。歩道からは樹木越しに図書館の内部までを垣間見ることができる形とする。

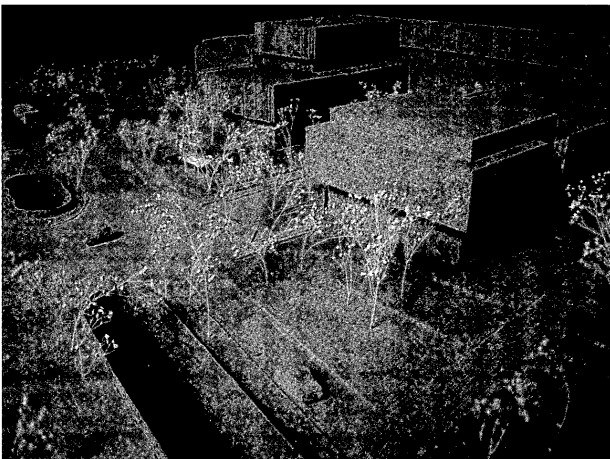


図-8 図書館周り模型写真

④ 彫刻棟周り

現況

- ・道路拡幅により以前よりは狭くなっているものの、西側には25~30mの幅があり、前庭の中では、まとまった広がりを持つ部分である。
- ・南側から西側にかけて、L字型の午後の日当たりのよい空間を持つ。
- ・卯辰山、河北潟方面への眺望を持つ。
- ・この空間は、彫刻棟建物内部とは視覚的、動線的につながりの無い空間である。
- ・正面アプローチからみて、この空間は行き止ま

りの空間となっている。

- ・高さ8mのサクラが、県道拡張工事に伴い道路際に移植されている。道路側の枝は葉がつかないなど衰弱の様子をみせている。
- ・前面の県道とは最高3mの段差があり、道路沿いはブロック擁壁となる予定である。
- ・天神坂を上がって来る時の眺めの中で、この擁壁は大きく目立つ構造物となる。

検討課題

- ・たまり空間としての演出
- ・道路沿いの擁壁の修景

修景計画

- ・たまり空間の演出

日当たりが良く、まとまった広がりを持ち、水面や緑陰、眺望などの快適な要素を持っている空間であるが、現状においてこの場所は、ほとんど人気の無い空間となっている。建物内部との空間的つながりが無いこと、アプローチから食堂前駐車場に向って行き止まりとなっていること、駐車車両によってアプローチと隔てられていることによると考えられる。ここでは、快適性のある好条件を活かし人のたまり空間を作り出すこととする。この部分では、全体を様々な表情を持つ小空間に分割し、訪れる人が居心地の良い自分達のテリト

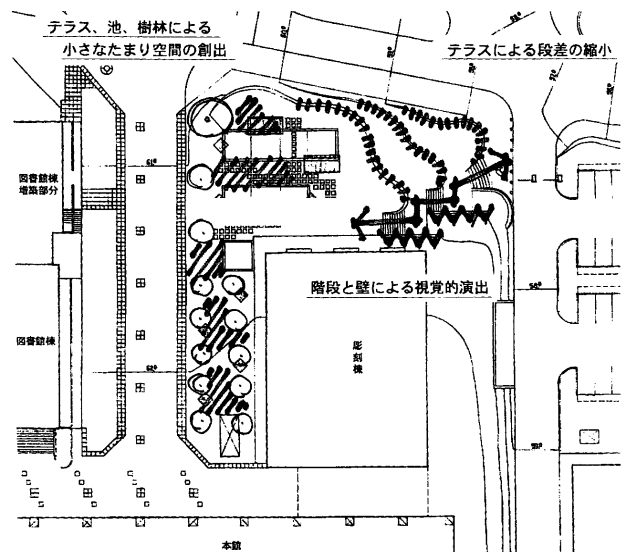


図-9 彫刻棟周りの修景計画

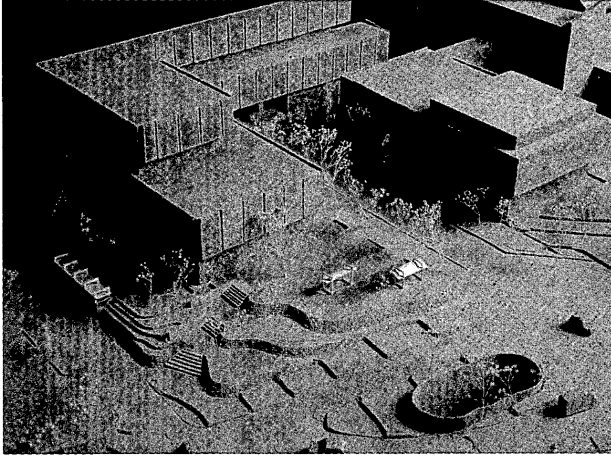


図-10 彫刻棟周り模型写真

リーを感じながら、滞在できるものとする。導入する形態は、高木の緑陰、3つの池、パーゴラ、3段のテラスと曲線の擁壁、縁台、ベンチ、壁面を持つ階段である。

緑陰やパーゴラは明暗の変化をもたらす。大きさの異なる3つの池は、地割りに南北方向への広がりや東西方向への隔たりを作るだけでなく、風や光の変化をその場所に取り込む。テラスと擁壁は眺望と高さの変化にくわえ、適度な広がりや囲みを持つ小空間を作り出す。壁面を持つ階段は水平垂直の視線方向の移り変わりと、見え隠れの変化をこの場所に提供する。全体として、いくつかの要素が重なり合い、個性あるいくつかの小空間を創出するものである。

池では画学生の画のモチーフとなる鯉など生物を飼えるよう、深さに変化のある構造とする。給水においては噴水の形態も導入する。

・道路沿いの擁壁の修景

道路沿いの擁壁は、前庭修景計画の前の段階では、段差が最高3mあり、天神坂を上がって来る時の眺めの中で、この擁壁は大きく目立つ構造物となる。今回の計画では、3つのテラスを造成することで、外からの視線を前庭に引き込む形とする。前庭が地域のオープンスペースとして機能する形態とする。

擁壁の最高の高さは、1.5mとし、歩道を歩く人に

とっても圧迫感を与えない大きさとする。地域景観との融合に配慮し、天神坂で使われている玉石積みを用いることとする。

⑤ 前庭周りの動線

現況

- ・図書館棟増築部分の北側には、新たに建物出入口が設けられる。本館との間に人の動線が発生する。
- ・食堂前の駐車場内にあるゴミ集積場への動線の需要が発生する。近道である彫刻棟西側には、現況では通路は無い。現況の連絡階段は幅が小さく、手すりも無い貧弱なものである。

検討課題

- ・正面アプローチの歩行性の向上
- ・彫刻棟西側から食堂前駐車場への通路の設置

修景計画

- ・正面アプローチの歩行性の向上

図書館棟増築部分の北側に、出入口が設けられている。ここでは本館との行き来の動線が発生することとなる。現況でみられる駐車車両を排除し、歩行性を高めるものとする。

- ・食堂前駐車場への新たな通路の設置

現在、図書館棟のあるレベルと食堂のあるレベル

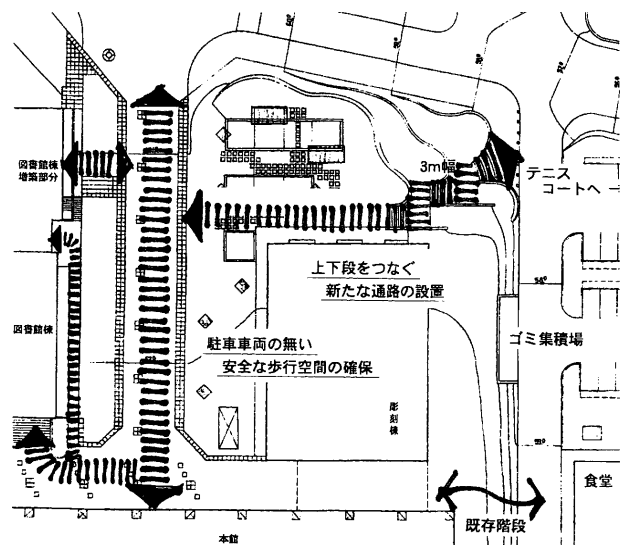


図-11 前庭周りの動線計画

の約3mの段差の連絡は、幅1mの手摺の無いコンクリート階段と体育館棟内部の階段だけである。上のレベルから食堂へ行ったり、ゴミ集積場へ行ったりするなど、需要は多いものの、貧弱な形態である。図書館棟増築部分の演習室、研究室からも、食堂のレベルへの新たな動線の需要が発生することから、彫刻棟西側の前庭部分に、上下段をつなぐ階段を設置することとする。階段は幅を3mとし、荷物を運びながらも歩き易いものとする。平面線形を雁行させることで、上り下りの際の周囲の見え方を楽しむことのできる形とする。

⑥ 学生駐車場

現況

- ・20台程の容量を持つ学生用の駐車場。
- ・道路を横断してキャンパスと連絡する動線が発生する。

検討課題

- ・横断歩道の位置
- ・道路反対側の沿道修景

修景計画

- ・横断歩道の位置

前面道路を挟んでキャンパスの向側に、以前より学生駐車場がある。道路拡幅工事により大きさは小さくなり、22台の収容台数となる。道路完成後は、この駐車場より道路を渡って通学する学生の動線が発生する。美大正面アプローチと前面道路、学生駐車場脇の細い道が出合う部分を、一つの交差点と捉え、2箇所に横断歩道を設置する。道路には通気口を囲む緑地帯があり、これを横断歩道の中島として利用することで、歩行者の安全性は増すこととなる。

- ・道路反対側の沿道修景

学生駐車場沿いの金沢大学敷地は、樹木が多く生育し、緑地景観軸を持つこの道路の特徴を強調するものとなっている。学生駐車場においても、同じように樹木の多い形態とすることで、沿道の景観の向上に供する形とする。

ここでは、彫刻棟西側からの移植木を植栽する他、

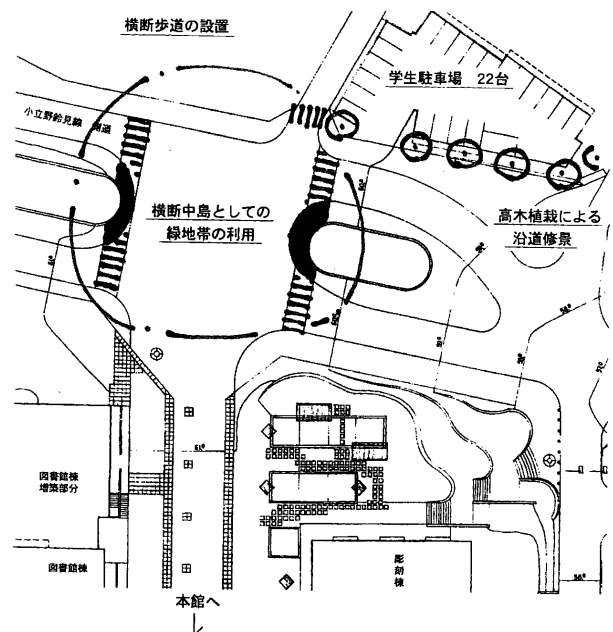


図-12 学生駐車場周りの修景計画

里山に育成する樹種を導入することで、遠景の卯辰山の景観との連続を図ることとする。樹種の候補は、コナラ、イヌシデ、ヤマボウシ、ヤマモミジ、ヤマザクラ、ケヤキ、エノキ、アワブキ、ヤブツバキ、モミなどを主に導入する。

⑦ 県道小立野鈴見線

現状及び工事完了後の様子

- ・道路中央には1mの高さの通気口の壁ができる。
- ・通気口の壁には緑地に囲まれる形となる。
- ・小立野側からは、テニスコート越しに卯辰山の眺望が得られる。
- ・美大へは、側道が連絡する。
- ・テニスコート前には、歩道キャノピーが設置される。

検討課題

- ・卯辰山への眺望を損なわない沿道修景
- ・通気口周りの修景（通気口の壁の高さ、仕上、植栽などの形態）
- ・歩道キャノピーの形態

修景計画

ここは美大の敷地ではないが、前庭の修景の考え

方に沿って、下記のように修景がなされることを石川県に対し強く望むものである。

・卯辰山への眺望を損なわない沿道修景

美大へのアクセスは、小立野鈴見線の側道を利用することとなる。この側道沿いの修景は、美大前庭の修景を利用し、側道の持つ緑地景観軸の特徴を強調することと、美大キャンパスが地域の緑地として機能する形とする。

小立野側からの眺めでは、美大のテニスコート越しに卯辰山への眺望がある。いわゆる額縁効果を利用し、この眺望を強調するため、美大正面入口付近の通気口の周囲の緑地に高木を列植する。歩行者や運転者の視距に配慮し、下枝の高い樹形の樹種を導入する。候補としてはタブ、モミ、クスノキ、ケヤキ、エノキなどが挙げられる。

高木の植栽は、眺望を活かすだけでなく、緑陰をつくり出す。道路沿いの明暗の変化により、美大正面入口付近では、道路軸方面から美大側への視線の誘導も容易になる。地域に開かれた緑地とし

てのキャンパスの入口を、道路景観の中に取込む形態とする。

・通気口周りの修景

通気口の壁は、道路沿いの眺めの中で、目立つ形態のものである。内側、外側とも同じ化粧材で仕

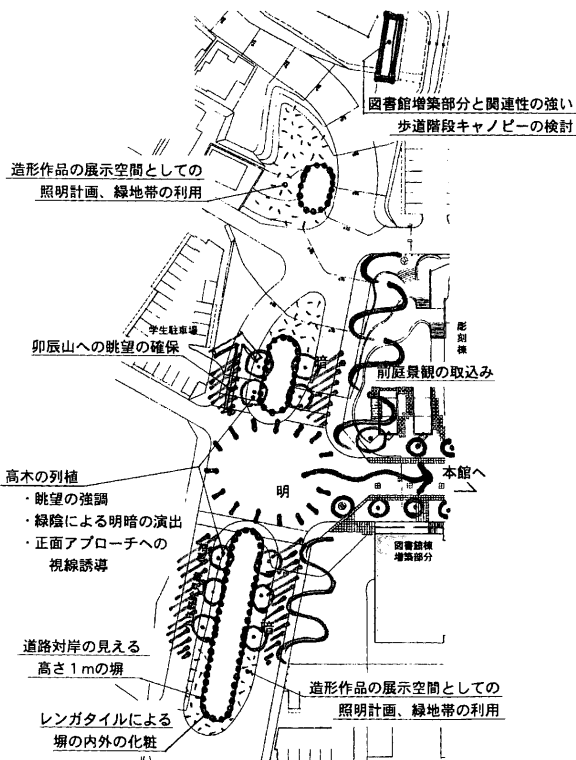


図-13 県道小立野鈴見線沿いの修景計画

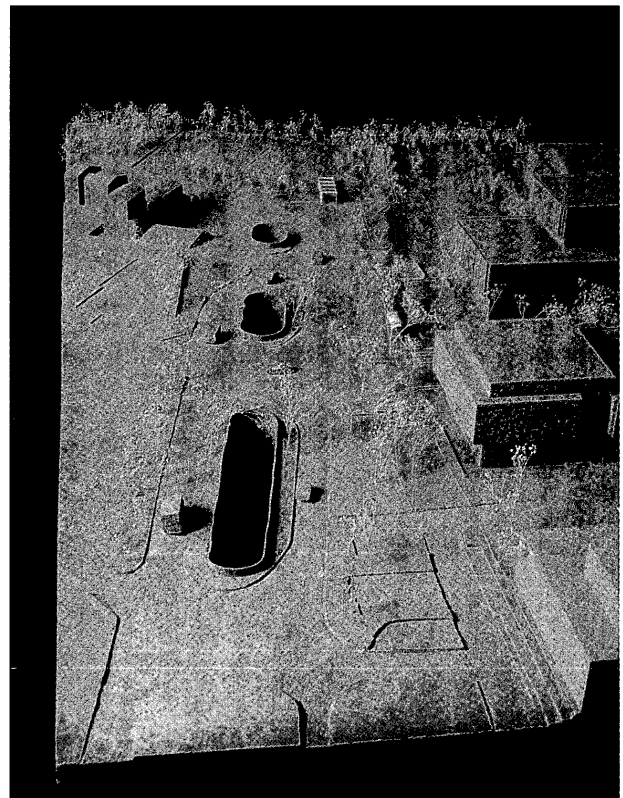


図-14 県道小立野鈴見線沿い模型写真

上げ、修景効果を高めるものとする。ここではレンガタイルを提案する。旧監獄の塀や旧美大の建物のレンガ造りを、この場所に関連性のある歴史的景観の要素と捉え、その形態が地中よりわずかにしみ出る形とし、その上に新たな景観が展開することを強調する。

通気口壁の高さは、道路対岸の眺めを活かせるよう、目線の高さより低い1m程度とする。

また、通気口周りの緑地は、屋外彫刻の展示空間として利用することで、美大前庭との雰囲気との連続性を向上することが可能となる。特に、テニスコートに近い部分の道路残地ともいえる広い部分

は、卯辰山への眺望を損なわないよう、高木の植栽を行わない。照明計画においては展示物を見せる形の演出を行う。この部分をこのような展示空間として利用すると、歩行者にとっては、遠景の眺望から近景の芸術作品まで楽しむことのできる、特徴ある通り空間となる。

・歩道キャノピーの形態

テニスコート脇の歩道階段キャノピーは、前庭の構造物と同様に、図書館棟増築部分とかかわりの強い形で検討する。

⑧テニスコート周り

現況

- ・テニスコートの敷地は、元と同じく2面が入る地盤ができる。
- ・食堂前駐車場よりは、3.3 m低い地盤となる。
- ・天神坂沿いはブロック積みの擁壁となる予定である。
- ・小立野側からは、卯辰山への眺望の中で、前景を形成する。
- ・浅野側方面からの眺めの中では、連続する斜面緑地の一部を形成する。

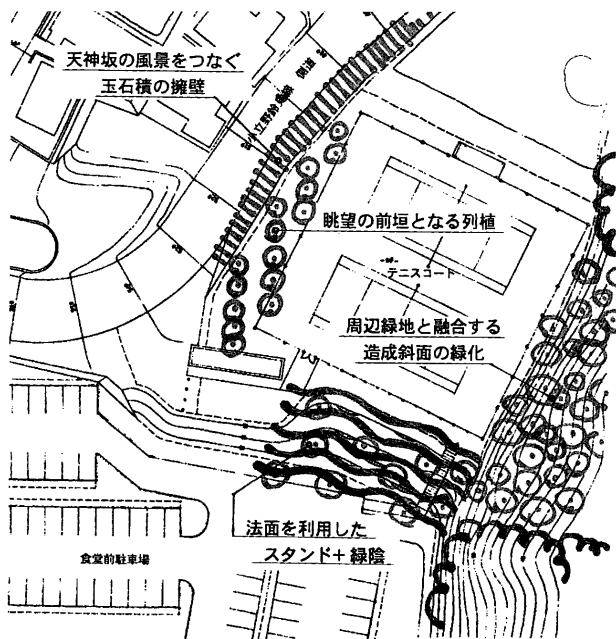


図-15 テニスコート周り修景計画

検討課題

- ・道路沿いの擁壁の修景
- ・眺望の前景としての修景
- ・斜面緑地としての修景
- ・食堂前駐車場との連絡

修景計画

・食堂前駐車場とテニスコートの連絡

約3mの高低差がある。発生する法面を利用し、テニスコートのスタンドとなる形態とする。ベンチや高木による緑陰を導入する。樹種は、風当たりの強くないところではカツラを、その他、クリ、アベマキ、ナツツバキ、トチノキなどを導入する。

・道路沿いの擁壁の修景

天神坂に見られる玉石積みの擁壁は、地域景観の特徴を形作る重要な要素となっている。坂沿いの景観的連続性への配慮と、地域景観の前庭への取り込みを考え、擁壁となる部分は玉石積みとする。

・眺望の前景としての修景

小立野方面からのアイストップとなるテニスコート南側は、卯辰山の眺望を切り取る前垣である。ここでは造園的修景樹種を導入し、自然景観である卯辰山の眺望を遠近の対比によって引き立てるものとする。樹種としては、アカバナトチノキ、コブシ、ヤマボウシ、シダレザクラ、ハゼノキなどを導入する。

・斜面緑地としての修景

人の入らない樹林部分である。周辺緑地との融合を図り、里山の樹種を導入することで緑化を図る。樹種としては、コナラ、イヌシデ、ヤマボウシ、ヤマモミジ、ヤマザクラ、ケヤキ、エノキ、アワブキ、ヤブツバキ、モミなどを主に導入する。



図-16 テニスコート周り模型写真

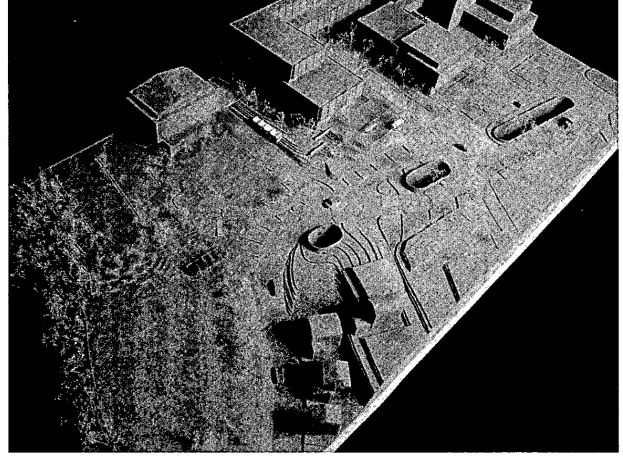


図-17 前庭周辺模型写真

4. 計画平面図

前庭整備の基本設計図は、以下の通りである。

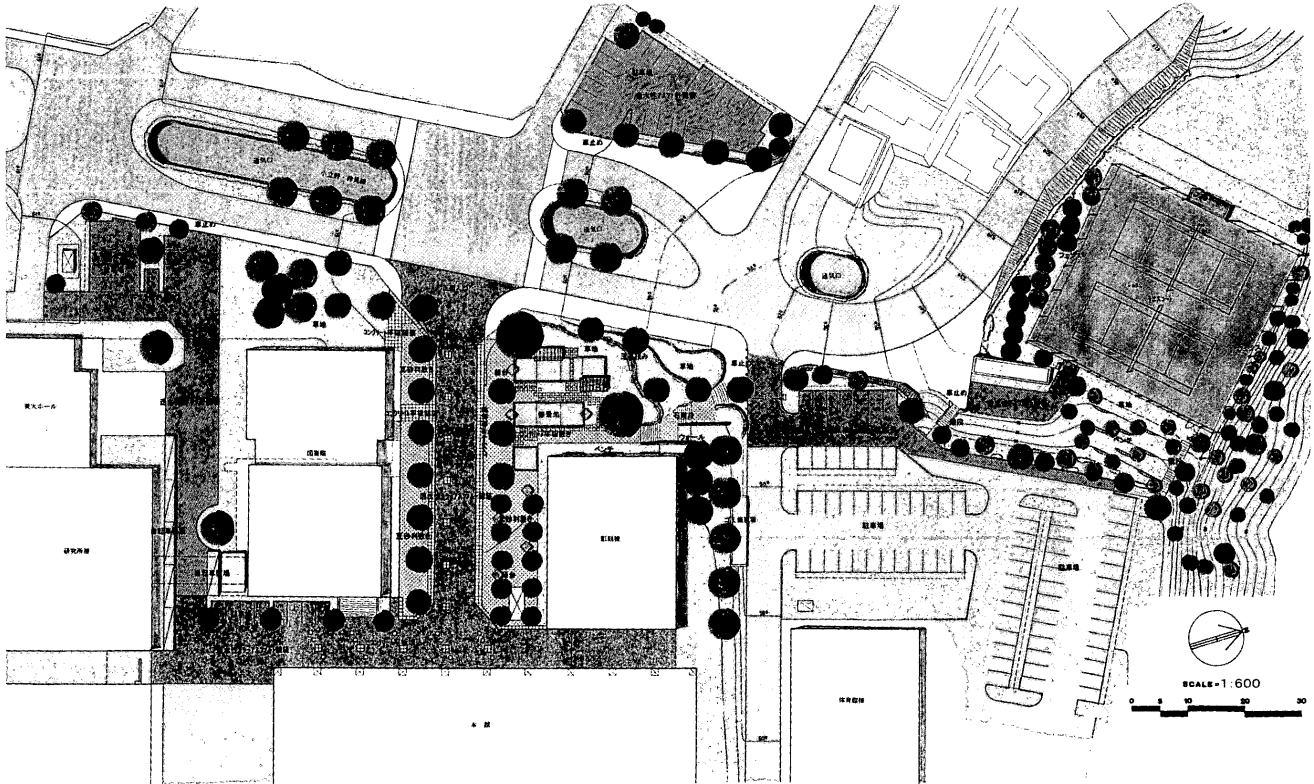


図-18 金沢美術工芸大学前庭基本設計平面図

(つば・たかひろ ランドスケープデザイン)